ISSN 0288-5646

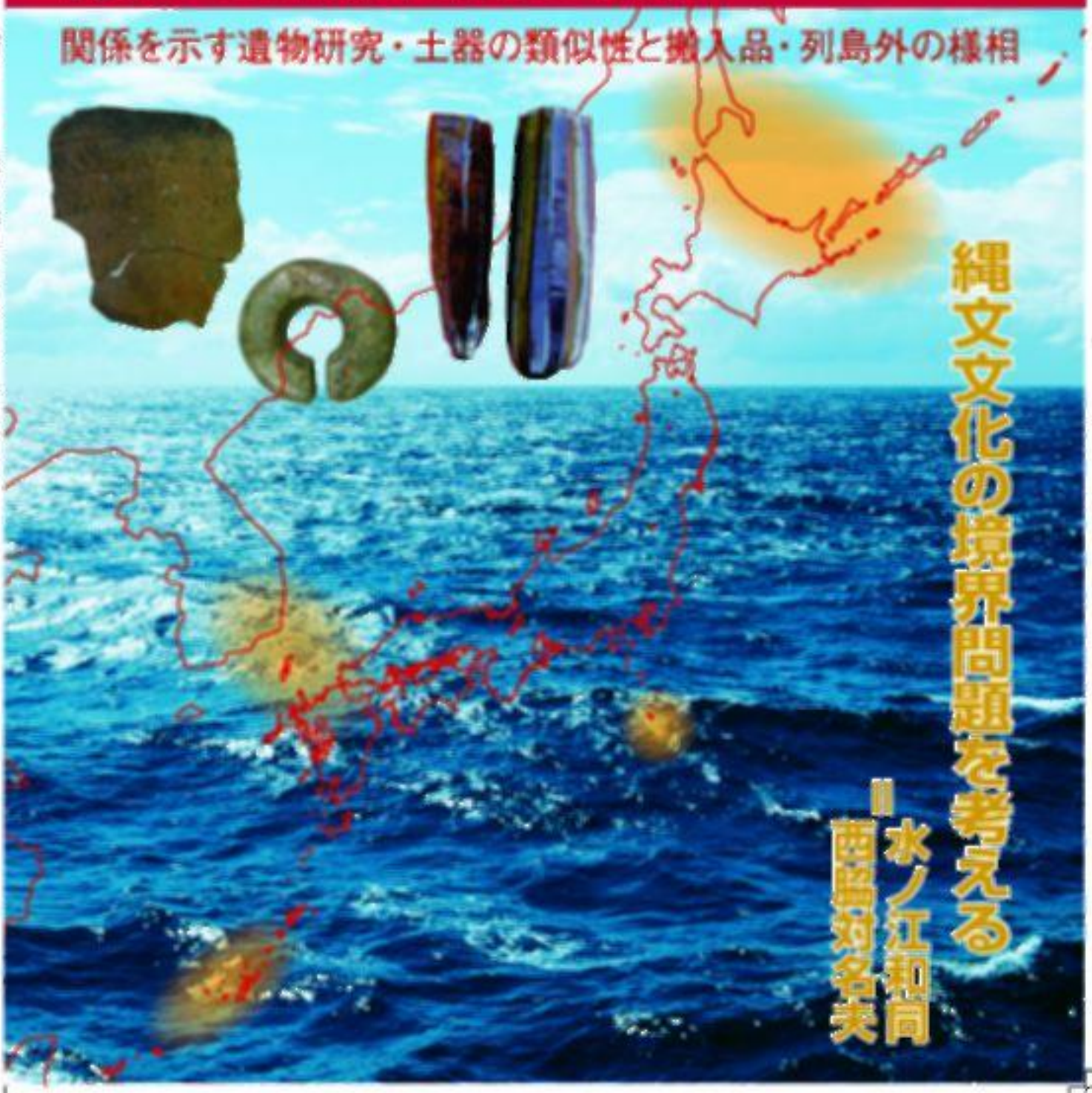
ARCHAEOLOGY QUARTERLY

季刊 考古学

第125号

特集 縄文文化の境界

関係を示す遺物研究・土器の類似性と搬入品・列島外の様相



縄文文化の境界問題を考える

水ノ江和同
西脇対名夫

季刊 考古学 ◆ 第125号 ◆ 特集 縄文文化の境界

雄山閣

サハリンの早期新石器文化と縄文文化

北海道東部の早期縄文に現れる発達した石刃製作の技術は、以前から大陸に起源をもつものとみなされてきた。近年サハリン州での調査の進展とともにこの伝播の過程の具体的な解明が進みつつあり、また両地域の最古の土器に見られる共通性も知られるようになってきている。

構成／A．A．ヴァシリェフスキー・B．A．グリッシェンカ・高倉　純・福田正宏・西脇対名夫

石刃鏃文化の比較研究

ドーリンスク地区スラーヴナヤ５遺跡（右の石核の長さ 12.1cm、Грищенко 2009 による）などに代表される南サハリンの早期新石器文化では、北海道産とみられる黒曜石を利用した石刃製作が活発である。この時期の文化交流を研究課題として 2013 年度から東京大学とサハリン国立大学の共同調査が開始され、今夏は湧別町市川遺跡の発掘調査が実施された。

写真提供／サハリン国立大学考古学教育博物館・福田正宏

ドーリンスク地区スラーヴナヤ５遺跡（左、径 4.0cm）と浦幌町新吉野台細石刃遺跡（右、径 3.8cm）。この種の遺物は以前から北海道東部で浦幌式土器に伴うことが知られ、玦状耳飾ともみなされたが多くは環状のものと考えられる。

写真提供／サハリン国立大学考古学教育博物館・北海道大学大学院文学研究科北方文化論講座

ホタテガイを製作台とした土器

ニェヴィリスク地区ガルナザヴォーツク２遺跡（左、底径 5.5cm）と帯広市八千代６遺跡（右、同 6.5cm）。この特徴は北海道の東部とサハリン州南部で初期の土器と考えられているものに共通する。八千代６遺跡では写真の資料に伴出した土器の付着物により 10,550～10,260CalBP の年代（Beta-194635）が報告されている。

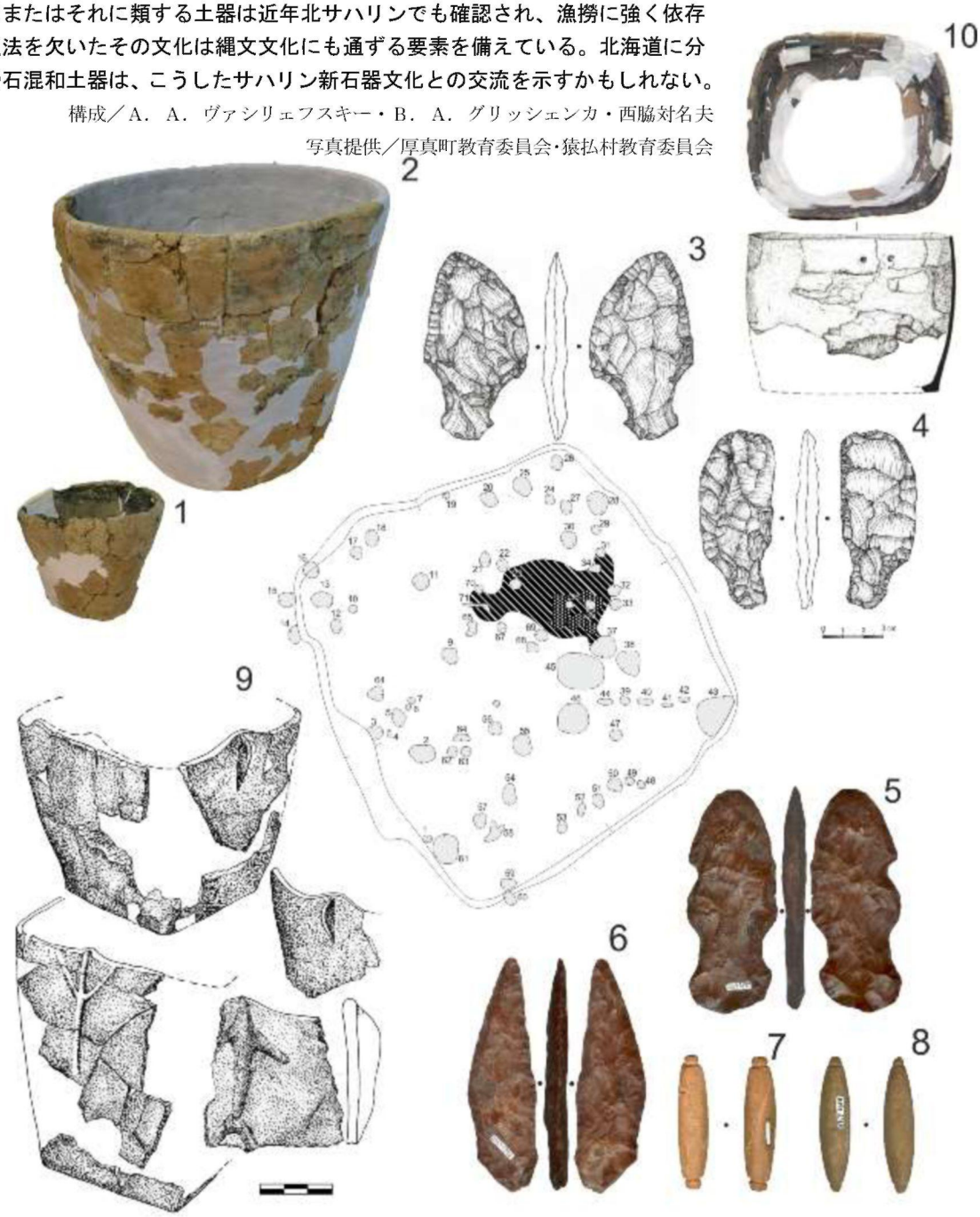
写真提供／Владислав Шкабенёв・帯広百年記念館

サハリンの宗仁文化、北海道の滑石混和土器

宗仁式またはそれに類する土器は近年北サハリンでも確認され、漁撈に強く依存し石刃技法を欠いたその文化は縄文文化にも通ずる要素を備えている。北海道に分布する滑石混和土器は、こうしたサハリン新石器文化との交流を示すかもしれない。

構成／A．A．ヴァシリェフスキー・B．A．グリッシェンカ・西脇対名夫

写真提供／厚真町教育委員会・猿払村教育委員会



1～4 及び住居跡：チャイヴァ 6 遺跡、5～8：スラヴナーヤ 4 遺跡（Vasilevski, Grischenko and Orlova 2010 による）、9：サドフニキ 2 遺跡（Шубин, Шубина, . Горбунов 1982 による）、10：ヴェンスカヤ 4 遺跡（Шубин 2008 による）

北海道の滑石混和土器

厚真町ヲチャラセナイ遺跡出土の円筒土器下層式 d（左、前期末、破片の天地 9cm）と猿払村浜猿払遺跡の浜猿払式（右、後期初頭、同 8.5cm）。

A. A. ヴァシリェフスキー・B. A. グリッシェンカ

極東沿海・島嶼世界の新石器時代の時期区分について

北東アジアの海に臨む地域の新石器文化は、どのような変革と交流を通じて成立し発展したのか。ここでのキーワードは新石器、縄文、革新、変化、極東沿海・島嶼世界、である。

過去を研究してみると、社会生活のさまざまな分野での多様な革新や変化が時代区分の指標となっていると言える。そうした革新や変化は物質文化から精神文化、社会組織にわたる広い範囲に及んでいる。革新とは新しい時代の内容の本質を決めるような全く新しく重要な出来事である。変化とはすでに生じた革新を推し進め、新しい時代の諸段階を示すものである。新石器という革新の根底にあるのは新たな資源をめざして否応なく経済が再編されたことである。東アジアの北部では主な生業資源として水圏環境の開発をその基礎に置く経済が形成された。海に沿った地域では、氷期の終わりから後氷期の宿命的な世界的海面上昇の条件のもと、それが唯一の可能な経済発展の道であった[1)]。

1　新石器という革新

（1）石器製作技術の変化

1 万 3 千年から 7 千 5 百年前、旧石器から新石器への移行期、及び初期[2)]・早期新石器時代の東アジア・北東アジアでは石器製作の分野に多くの革新が生じた。南は日本列島や朝鮮半島からチュコト半島まで、石材を節約でき多様な道具の刃部として置換のできる細石刃の技法が卓越した。その後およそ 7 千 5 百から 7 千 2 百年前[3)] になると、技術的にさらに進歩した石刃技法がこれに置き換わり、北海道とサハリンの住民の間の黒曜石の交換など資材交易の規模は縮小した。

（2）新たな獲得経済の諸形態の出現

ユーラシアの東部と北東部には明らかに異なる新石器の世界があった。南には農業を持つ生活圏が 1 万 5 千から 1 万 2 千年前に見られ、北には狩猟・漁撈による後期旧石器の獲得経済に基礎を置いた世界が 1 万 3 千年から 9 千年前、華北・朝鮮半島・日本列島及びアムール地方に形成された。約 6 千ないし 5 千 5 百年前、朝鮮半島では穀物の栽培が確立した[4)]。完新世になると生産経済の境界線は次第に南から北へ移り、大陸ばかりでなく東アジアの島嶼世界でもそれは認められる。原始的な農耕圏は縄文中・後期には北海道に達した[5)]。東アジア北部の新石器時代は高度に特殊化した複雑な獲得経済の諸形態の発生と動的発展、そして増大する人口と環境の変化という条件のもとにおかれた社会の需要を満たす新たな生活様式の形成とをその経済的な内容としている。

広大な沿海地域の住民が漁撈生活へ移行したことで物質文化のあらゆる分野に軒並み変化が生じ、それが新たな時代の外貌を決定した。島嶼の環境では旧石器の狩猟経済から特殊化した複雑な沿海経済への移行こそが新石器文化の内容であり、この時点で東アジア北部におけるその本来的な傾向が決定されている。

（3）定住的生活様式への移行と新たな居住形式の出現

日本列島の南部・中央部の住民の定住生活は縄文草創期の古い段階から知られている[6)]。1万1千年前かそれ以前の九州の複数の遺跡で半地下式の建物、石囲炉、集石、煙道付きの炉穴などいくつもの型式の構造物が発見されており、定住への習熟が成し遂げられていたことを示している[7)]。定住的な生活様式と直接関連する変化は、旧石器の狩人の仮小屋に代わって現れた小屋組みで覆った半地下式建物である。それは北海道の早期新石器の居住地を特徴づけるものでもある。沿海地方で最も古い住居はB. И.ヂヤコフがウスチノフカ4居住地で発見した「基礎の掘り下げと風除室または廊下のように見える 2 つの入口のある」半地下式建物である[8)]。半地下式建物はアムール川流域のオシポフカ文化、ノヴォペトロフカ文化、マリシェヴォ文化の居住地でも広く発見されている。サハリンにおいて潟湖の住民が定住的な生活様式を持っていたことを示す直接の証拠は前期新石器宗仁文化の半地下式住居である。東アジア北部で型式学的に早期新石器のものとみなされる住居跡は互いに対比が可能である。地域ごとに特徴はあるが新石器住居の建築は原則として竪穴の掘り下げは20~30cmと深くなく、規模は2×2mから6×6mまでである。骨組みは原始的で傾斜した垂木と垂直の柱が建物を支持する。沿海地方（ウスチノフカ4）やアムール地方（ガーシャ2号住居）、またサハリン（スタラドゥプスカヤ3、スラヴナヤ4（8,150±150年前））や北海道（暁、8,900±500年前）でも住居はこのようなものである[9)]。

島嶼の住民が定住的な生活様式に移行した理由は恒常的な移住が望ましい生活の安定をもたらさなかった点にある。陸上の資源に限界があるために遊動的な社会はかなり短期間のうちに劇的にその生活を変化させざるを得なかった。資源消耗の過程は最も豊かな、川の河口、湖、海沿いの潟などの限られた地域においても全く同様であった。新しい生活の様式が形成され、それには何よりも一定地域の水産資源を熟知することで拠点集落やグループの宿泊地を維持する方法が伴った。しかし新しい経済の形成過程が一直線に進んだと考えてはならない。いくつかの社会は飢餓によって滅びるほかなく、また他の一部は島々から退去する一方、大陸からの新規移住者たちは新たな経済と新しい生活様式をすでに出来上がった形で島嶼へと持ち込むことができた。島々には遊動的な狩猟者と定住的な魚食者のグループが同時に居住し、また文化の発展段階において異なるいくつもの社会が並存したことを想定しよう。

2　考古学上の新石器諸文化の形成

（1）地域文化の形成

新石器時代の考古学上の文化の最も重要な特徴とみなされるのは住居群や居住地の形態と特性のほか、土器、装飾品、特徴的な形式の道具などである。文化伝統の地域差は即ち新石器への移行期と早期新石器の社会的集団生活に新たな現象が生じたことを示している。1万3千から7千2百年前の段階で注目されるのはある程度まで技術的に同一の石器製作が南サハリンと北海道にみられ、それを決定する特徴的な石器、つまり御子柴型尖頭器とか立川型の有舌尖頭器のようなものがみられることである。それらと比較されるのはオシポフカ文化の遺物であり、アムール川下流・中流域と北サハリンでは特徴的な木葉形の両面調整石器の伝統がある。

沿海地方には放射性炭素年代で約 1 万年前にサハリンのものに近い細石刃技術の文化伝統が出揃っており、最古の土器と磨製石器が共伴し、住居群のある居住地が発見されたことで名高いが、しかしこの地域における文化の特徴がなお明瞭でないのは一部の研究者がそれを中石器文化とみなすのに対して [10)]、他の人々は「中石器」という言葉の使用を拒み「移行期」という概念を適用するからである [11)]。移行期におけるもう一つの個性的な文化的領域は本州島であり、そこでは長者久保文化という名称のもとによく知られた隆起線文土器の文化が支配的であった。

ここでの記述はこの地域のこの時期に関して、考古学的な文化というよりも文化的な領域について語った方がよいだろう。この領域は非常に広大な地域にまたがっており、またその存続期間は放射性炭素年代測定の結果によれば 4~5 千年に達しているので、共通性は高いとしても地域的な物質文化と経済の伝統について述べるべきである。新石器のそれ以降の諸段階では文化集団の地域性がさらに強まり、物質文化伝統の多様化によってそれが特徴づけられるわけだが、我々はそうしたものを考古学上の文化や、文化の中の変異等としてとらえる。ロシア極東と日本列島の島々の景観は峡谷を大きな特徴としている。つまりそれらは川の谷間であり、山脈で区切られ、そこに海岸部が続いている。地形の性格が変化に富んでいるのは明らかで、山地と海岸の景観が組み合わされている。動物や鳥の季節的移動の経路、そしてとりわけ鮭鱒を含む魚の回遊、さらには人々の移動は海岸に沿いまた谷に従い、川の渓谷を通っていた。定住と海岸性の経済、長距離の遊動との絶縁によって、おそらく定着的な社会に漁のできる河川、魚の産卵床、海獣の休息地のある岬の海岸、海峡に面した土地、海獣の群れの移動経路上にある小島などの用益地の占有が発生したことだろう。

（2）移行期と初期・早期新石器の諸文化

要約すると、サハリンでは旧石器から新石器への移行は放射性炭素年代によれば 1 万 3 千年から 9 千年前の期間に行われた。較正すればこれらの年代は暦年上の前 1 万 3 千年紀から 1 万年紀にあたる。サハリンと北海道の移行期はアムール地方や日本列島の島々の初期新石器と同時期であり、相互に比較すべきものである。唯一の差異はサハリンと北海道の移行期の遺跡で土器が欠如しているか僅少であり、隣接した領域では土器が多量に発見

されていることである。その他の点では世界のこの地域における物質文化の発展の水準はほとんど同一であった。移行期間と早期新石器の危機的な時期に、環境の急激な変化に対して社会がしばしばとった反応の方法は遊動的な生活様式への移行ないし逆行であった。しかし東アジア北部の沿海･島嶼世界において、旧石器から新石器への移行の本質的な内容は各地の社会が定住的な生活様式を形成したことであった。これは日本海とオホーツク海の沿海地域で多面的な獲得経済の基礎の上に生じた。

安定した発展の時期には、定住への移行と時を同じくして各社会による用益地の専有が形成され、複数の社会の間での漁場の分配も行われるものである。このことは固定した領域内で作業を共にする人々の団結をもたらし、同時にこの地域の沿海･島嶼世界の中のかなり広い地域を範囲としてそうした団体の間に固定した関係が形成される結果となる。この基礎の上におそらくは「安定した生態的地位」が形成され、移行の時期にその範囲内で強度の接触が生じ、由来、経済、生活様式、物資地及び精神文化の点で相互に親密な住民集団が形成されるが、我々はそれを考古学上の初期･早期新石器文化として把握する。おそらく住民の連帯と部族の形成はこのようにして生じ、それが考古学的な複合に反映されて私たちに考古学上の文化や地域の編成として把握されるのだろう。日本海とオホーツク海に面した沿海地域の範囲では少なくとも 4 つの主要な考古学上の文化区域と、移行期及び初期新石器の文化がみられる。それは本州の、また道南と道央にも存在したらしい長者久保文化、北海道と南サハリンの御子柴･立川文化、アムール川下流域と北サハリンのオシポフカ文化、及び沿海地方のウスチノフカ 3 式など後期ウスチノフカ文化である。アムール川中流域でそれらに平行するのはグロマトゥハ文化であり、カムチャツカでは後期ウシュキ文化である。

東アジア北部の沿海世界における早期新石器への移行は放射性炭素年代では 9 千年ほど前、また較正による暦年上では前 9 千年紀に生じている。この段階はおよそ 2 千年続き、7 千年ほど前、つまり概ね前 7~6 千年紀に終わっている。この時期に沿海地域の住民の人口の増大と定住への移行の兆候がみられ、居住地の数の増加がめだつ。早期の終わり、8 千~7 千 2 百年前までに（較正による暦年上の数値では前 7~6 千年紀までに）西から、すなわち極東の大陸部分から東へ向かって急速かつ広域に、文化的な層というべきものの波及がありそこには石刃鏃を伴う [12)]。この文化の南への波及に対する障壁となったのは本州北部、津軽海峡南側の縄文早期の領域であり、また一方では大陸の沿海地方より南の部分の人口稠密な早期農耕民であった。

（3）クリル列島の新石器文化

クリル列島での従来の研究は主としてずっと新しい時代に関したものであり [13)]、新石器の研究は断片的で北海道の縄文への対比に頼っていた [14)]。早期新石器の遺物は今のところまだ国後、色丹、択捉島で散発的に知られているに過ぎず、そのうえ研究者は、根本的に年代の異なる「早期新石器」の概念と「早期縄文」を混同していた。Ю.B.クノロザフが確

証したとおり、択捉島では早期新石器から中期新石器へ移る頃、つまり 7,030±130 年前、較正年代では前 5,840±130 年、したがって前 6 千年紀にはすでに住民がいた。熱心な会合とはじめての層位学的な調査の結果からみて [15]、クリル諸島では石器製作上の 2 つの伝統が判明しており、それはどちらも北海道とサハリンの早期新石器にもよく知られているもの、つまり細石刃（国後、色丹、松輪島）の伝統と、主として剥片及び両面調整石器の伝統（択捉島）であり、また同時に北筒式、浦幌式 [16]、沼尻式ほかの土器も採集されている。こうした発見と、また択捉島にあるヤンキート 1・オーリャ湾 1・カサートカ・リサザヴォーツク・タンコーヴァヤ・ビリェーザフカ 1 の各遺跡の放射性炭素年代 [17] から、この地域の大小の島々の住民の間に早期・中期・後期新石器を通じて長く確固とした関係があり、またそれは歴史的・文化的に縄文の領域の北方局面という枠組みの中にあった考えることが許される。

３　極東沿海・島嶼世界の新石器時代

（１）新石器時代の時期区分

それ以後の沿海地域の新石器諸文化の発展は、生活を保障するための技術とシステムの基本的原則という観点からみると本質的に共時的に同一方向に進んでいった。また同時にきわめて大雑把には、アムール地方・沿海地方・サハリン・北海道・クリル列島にカムチャツカをも含む極東の沿海及び島嶼地域の全体を通じて、新石器の諸段階の年代は以下に模式的に示すような枠組みの中にあると言ってよい。旧石器から新石器への移行はここでは 1 万 3 千から 9 千年前に生じ、早期新石器は 9 千から 7 千 5 百ないし 2 百年の範囲で確実な年代が与えられ、中期新石器の段階は 7 千年から 4 千 2 百ないし 3 千 8 百年前の時期に比定され、そして最後に後期新石器は放射性炭素年代で 3 千 8 百年前と見積もられ、金属器の出現する 2 前 5 百ないし 3 百年前、もしくは前 1 千年紀中頃まで続く。

カムチャツカでは議論が続いており、特に初期及び早期新石器のウシュキ文化複合の認定についてそうあるが、この図式全体としては仮説としてかなり有望であるように思われる。我々の図式に近いものとして И.Я.シェフカムードらがアムール下流地方の新石器諸段階の年代比定を行っており [18]、全ての地域にわたる遠隔地間の新石器の年代及び諸段階の対比によって問題をより詳しく検討することが可能になり、また極東各地方の考古学的な材料に十分な注意を払うことができる。

（２）新石器時代をもたらした交流

我々の考察を終えるにあたり、結論として次のように言おう。島嶼世界の領域において新石器時代に 4 つの世界の住民が遭遇している。中国北部、沿海地方、アムール右岸から来た狩猟者と漁民。タイガに覆われた東シベリア諸河川の住民がアムール川左岸と河口に接する北方の地域を通って大洋へ出ようとするもの。東アジアの島嶼住民が北方の海岸に適応しつつ南からカムチャツカに至るもの。そして北極圏の沿海狩猟・漁撈者の集団がお

そらく北からクリル諸島へ向かうものである。そしてこの多様性が条件となって、激しい遺伝的・文化的な交換があり、新石器時代の新しい民族と文化の形成がなされたのが北東アジアの沿海・島嶼世界であった。

注

1）Василевский А. А. *Каменный век острова Сахалин*. Южно-Сахалинск: Сахалин. кн. изд-во, 2008.

2）「初期新石器」という概念は、最古の土器その他新石器の兆候となる要素の存在が保存のよい遺跡で発見され、1 万 3 千から 1 万年前の炭素年代が得られているアムール川下流地方や日本列島との関係のもとに用いている。

3）以下年代の表示は未較正の数値による。

4）Чхве Джонпхиль Новый взгляд на неолит Кореи. *Археология, этнография и антропология Евразии.* №3 (7), 39-50. Изд-во ин-та археологии и этнографии СО РАН, 2001.

5）小野，2000。

6）雨宮瑞生「最後の遊動生活—南九州縄文草創期資料を取り上げて—」『先史学･考古学研究』第 3 号，31-51，1992。

7）Miyata E. The earliest period of the appearance of ceramics on Southern Kushyu. *The origin of Ceramic in the Far East.* 129-133. 1995.

8）Дьяков В.И. *Многослойное поселение Рудная Пристань и периодизация неолитических культур Приморья*. Владивосток: Дальнаука, 2002.

9）注 8 文献。Окладников А. П., Медведев В. Е. Исследование многослойного поселения Гася на нижнем Амуре. *Изв. СО АН СССР.* Серия общ. 1, 93-97. науки. Вып., 1983. Лапшина З. С. Проблема адаптации в условиях позднего плейстоцена — раннего голоцена Нижнего Приамурья: выделение котлованов жилищ в осиповской культуре. *Электронная библиотека Музея антропологии и этнографии им. Петра Великого (Кунсткамера).* 1-11. Режим доступа. РАН., 2008. Грищенко В. А. *Ранний неолит острова Сахалин*. Южно-Сахалинск: СахГУ, 2011. 北沢実「縄文早期平底土器群の様相」日本考古学協会 1999 年度釧路大会実行委員会編『シンポジウム海峡と北の考古学』資料集 I・テーマ 1：旧石器から縄文へ，273-274，同委員会，1999。

10）注 8 に同じ。

11）Крупянко А. А., Табарев А. В. *Археологические комплексы эпохи камня в Восточном Приморье*. Новосибирск, 2001.

12）木村英明『北東アジアにおける石刃鏃文化』札幌大学文化学部考古学研究室，1999。注 9 の Грищенко 2011 文献。

13）Fitzhugh B., Shubin V. O., Tezuka K., Ishizuka Y., Mandryk C. A. S. Archaeology in the Kuril Islands: advances in the study of human paleobiogeography and Northwest Pacific prehistory. *Arctic*

Anthropology. Vol. 39, N 1/2, 69-94. 2002.
14）*Атлас Курильских островов*. Российская академия наук. Институт географии РАН. Тихоокеанский институт географии ДВО РАН; Редкол.: Котляков В. М. (председатель), Бакланов П. Я., Комедчиков Н. Н. (гл. ред.) и др. М.; Владивосток: ИПЦ «ДИК», 2009.
15）山田悟郎「千島列島の遺跡分布と環境適応について」北海道立北方民族博物館編『北方の当初における人と文化』第10回北方民族文化シンポジウム, 同館, 1－18, 1996。Vasilevski A. A., Grischenko V. A., Orlova L. A. Periods, boundaries, and contact zones in the Far Eastern insular world of the Neolithic (based on the radiocarbon chronology of sites on the Sakhalin and Kuril Islands). *Archaeology, Ethnology and Anthropology of Eurasia.* № 1 (41), 51-69. IAET SBRAS, 2010. Yanshina O. Y. and Kuzmin Y. V. The Earliest Evidence of Human Settlement in the Kurile Islands (Russian Far East): The Yankito Site Cluster, Iturup Island. *The Journal of Island and Coastal Archaeology*. 5: 1, 179-184. 2010.
16）注15の山田1996、及びYanshina and Kuzmin 2010文献。
17）Zaitseva G. I., Popov S. G., Krylov A. P., Knorozov Yu. V. and Spevakovski A. B. Radiocarbon chronology of archaeological sites of the Kuril islands. *Radiocarbon.* Vol. 35, No. 3, 507-510. 1993.
18）Шевкомуд И. Я., Кузьмин Я. В. Хронология каменного века Нижнего Приамурья. *Культурная хронология и другие проблемы в исследованиях древностей востока Азии.* Восьмые Гродековские чтения: материалы регион. науч.-практ. конф., 7-46. Хабаровск: Хабаровский краевой краеведческий музей им. Н. И. Гродекова, 2009.